

## 旧ポルトガル領の独立

1) 【1: 】体制 (1932~74) 下のポルトガルは植民地の維持に固執し、ギニアビサウ (ポルトガル領ギニア)・アンゴラ・モザンビークにおいて激しい民族解放闘争を惹起せしめた。No.185参照。

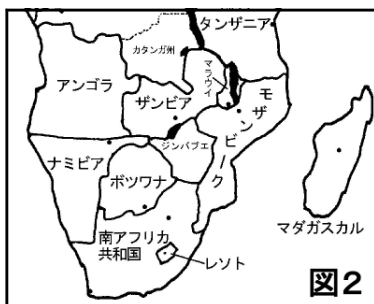
2) ギニアビサウ (旧ポルトガル領) での出来事は実に印象的である。

1956年に【2: 】が組織したギニア・カーボベルデ独立アフリカ党 (PAIGC) は比較的穏健な団体であったが、1959年8月3日にポルトガル軍による労働者殺害事件以降、カブラルは農村を部隊にした武装闘争路線を打ち出し、1963年からポルトガル政権に対して独立戦争を開始した (ギニアビサウ独立戦争)。PAIGC 軍は東側諸国、特に【3:

】の支援を受けてゲリラ戦を展開し、解放区を拡大しながらポルトガル植民地政府がそれまで手を着けずにいた医療や教育を普及させた。ついに1973年9月24日に PAIGC はギニアビサウ国 (1977年、ギニアビサウ共和国に改称) の独立を宣言した。図1参照。

特筆すべきは次の経過である。ギニアで戦うポルトガル軍の兵士や若手将校の間にも、PAIGC による民生の向上などを目の当たりにする内に植民地戦争への疑念が芽生え、1973年9月にはギニアで勤務した軍人を中心に軍内に「国軍運動」(MFA) が組織された。MFA は1974年4月25日のポルトガルの【4:

】の実行部隊となり、エスタド・ノヴォ体制を崩壊させ、新政権は植民地解放を宣言した。1974年9月10日にギニアビサウの独立がポルトガルの新政権によって承認された。単にギニアと書くと、それは旧フランス領のギニアのことで、指導者【5:



3) アンゴラ

1961年からアンゴラ独立戦争を戦い、1974年にポルトガルの新政権が植民地解放を宣言したことから、1975年に独立を達成した。独立後も1975年から2002年まで社会主義政権と反政府勢力との間の内戦が続いた。内戦終結後は石油やダイヤモンドなどの豊富な資源を背景に急激な経済発展を続けている。しかし、1000万を越える【6:

4) モザンビーク

1964年からモザンビーク独立戦争を戦い、ポルトガルの新政権が植民地解放を宣言したことから、1975年に独立。成立した社会主義政権に脅威を感じる南アフリカ・

ローデシアの支援を受けた反政府勢力との間の内戦が、1977年から1992年まで続いた。内戦終結後は好調な経済成長を続ける反面、【7: 】の蔓延が問題となっている。隣接国が全て英語圏の国家であるため、1995年からイギリス連邦に加盟している。図2参照。

## コンゴ動乱 (1960-65年)

1960年の独立直後の反白人暴動に旧宗主国の【8: 】軍が介入する中、カタンガ州の重要鉱物資源 (ウラン、コバルト、銅) を確保したいベルギーの支援を受けて同州が独立を宣言して内戦が勃発。首相ムルンバがソ連に支援を求めると、コンゴの共産化をおそれた【9: 】が介入、国際紛争化した。1965年、軍部クーデタで親アメリカ派政権成立。その後も内戦は続き、現在に至るも安定を見ていない。戦闘の他に虐殺・感染症などで、毎月約4万5千人もが亡くなっていると言われている。



## ルワンダ内戦 (1990-1994年)

1) 15世紀以来、少数部族のツチ族が多数部族のフツ族を支配するルワンダ王国が栄えた。19世紀末にドイツ領となり、第一次世界大戦後、【10: 】の委任統治領。第二次世界大戦後、同じく信託統治領。1959年、ベルギーによる分断統治下でツチ族の支配に対するフツ族の長年にわたる不満が激化して、ついに暴動が発生した。ツチ族による支配は終わり、1962年7月、共和国として独立。図4参照。

2) 隣国ウガンダに逃れた旧支配部族のツチ族を中心とする反政府ゲリラ組織「ルワンダ愛国戦線 (RPF)」が、1990年9月に越境攻撃を開始、「ルワンダ内戦」が再燃。1994年の大統領機撃墜を機に、政府軍と RPF 軍が激しく対立し、無差別虐殺が始まる。1994年7月、RPF 軍が全土を制圧、フツ族穏健派を大統領とする新政権を樹立した。この内戦で両部族合計で50~100万人の虐殺が行われ、200万人以上の難民が発生した。

## ナイジェリア内戦 (1967-70年) : あるいはビアフラ戦争

1) ナイジェリアの3大民族は北部のハウサ族 (ムスリム、遊牧民)、西部のヨルバ族 (ムスリム、農耕民)、東部のイボ族 (キリスト教徒、農耕・商業民) である。かつて、【11: 】は北部で奴隷狩りを行い、海岸地帯でヨーロッパ人に売り渡したという暗い過去を持つ。植民地時代には、キリスト教に改宗、英語教育も受けたイボ族は植民地官吏として優遇され、商人としてもナイジェリア各地に進出し、他の民族からは「黒い白人」、ヨーロッパ人からは「黒いユダヤ人」の異名をとった。

2) 1966年のクーデターで【12: 】が実権を掌握したことに対し、イボ族の将校がクーデター未遂事件を起こすと、

北部ではイボ族への襲撃事件が頻発した。1967年12月、東部州軍政長官オジュクは【13: 共和国（イボ族）】の分離独立を宣言した。フランスは正式承認はしなかった。コートジボワール・ガボン・ハイチ・タンザニア・ザンビアがビアフラ共和国を承認した。

3) 緒戦はビアフラ共和国軍（＝イボ族）が優勢。ナイジェリアもイギリス、ソ連などの支援を受けて盛り返し、ビアフラ共和国はフランスから武器援助を受けた。大国が双方に武器援助をしたのは、ビアフラ南部の海岸沿いには莫大な【14: 資源があったからだ。図5参照。

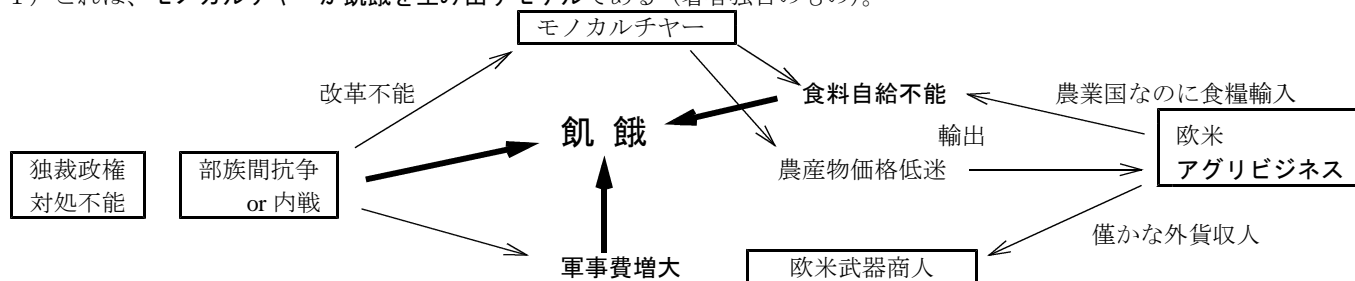
4) 1968年に南部の海岸地帯がナイジェリア政府軍に占領され、補給路を断たれたビアフラ共和国（＝イボ族）は食糧不足となり、餓死者が続出した。国際赤十字をはじめ、世界中の救援団体が食料とスタッフを送り込もうとしたが、「早期解決」を優先するイギリス、ソ連は協力せず、ナイジェリア政府軍は彼らを妨害した。徹底抗戦を続けたビアフラ共和国軍（＝イボ族）は、1970年1月についに降伏した。死者総数は約200万人、そのうち大部分が子供を含んだ餓死者であった。骨と皮だけにやせ細り下腹が丸く膨れる栄養失調で死亡寸前の子どもの写真が「ビアフラの悲劇」として世界中に配信され、涙と怒りを誘った。当時これを見て医学部進学を志す高校生も多かった。

5) 内戦後、ナイジェリアは軍事政権の下で州の再編成を行い東部州を細分化、1991年には首都を東部・西部・北部の中間地点に当たるアブジャへ移した。1999年の民主化を契機に再び民族や宗教の対立が激化し、北部では12の州がイスラム法を導入したためキリスト教徒が迫害された。産油地帯では、「石油の利益が地元還元されていない」と不満が高まっている。民主化によって上からの抑圧がなくなり、不満が噴出し、今日を迎えている。



## モノカルチャー

1) これは、モノカルチャーが飢餓を生み出すモデルである（著者独自のもの）。



2) モノカルチャーとは、発展途上国において、植民地時代の宗主国の政策によって、国の経済が、単一ないしは少数種の商品作物（または特定の鉱物資源）の生産と輸出に依存していること。以下、ラテンアメリカの場合で説明しよう。ラテンアメリカ諸国では独立の中心となったクリオーリョ富裕層や外国資本の経営するプランテーションを中心にモノカルチャーが推進された。たとえば特定の品種のコーヒーに依存するため、①気候の変動で不作の時は一斉に不作、豊作の時は一斉に豊作で価格は暴落。病害虫が広まった場合、壊滅の危険もある。②他の産地との関係で形成された【15: の変動に大きく左右される。たとえば硝石とか、特定の鉱物資源開発に依存することを意味する場合もある。その場合も、特定鉱物に依存するため①埋蔵量が尽きたらおしまいであり、②国際価格の変動の影響を受けるのは農産物と同様である。ラテンアメリカ経済の停滞の最大の原因の一つである。アジア・アフリカでも推進者と作物（鉱物）の種類が異なるだけで本質は同じである。

## 内戦の残したものを

内戦による混乱は、アフリカ諸国の経済成長を著しく阻害した。

近年では強いられたモノカルチャーさえ、実行が困難になり、国民のための農業を回復できないまま、急激な人口増加を迎え、地球温暖化の影響と言われる干ばつなど異常気象のため食料生産は不振であり、連年大量の餓死者を出している。

## アパルトヘイト

【16: 】は、かつてアパルトヘイトで悪名高く、オリンピックからも締め出された国！

1991年 黒人隔離法撤廃

1994年 全民族参加による選挙。ANC（アフリカ民族会議）の獄中27年、不屈の政治家【17: 】が大統領に当選（任1994-1999）。

1995年 真実和解委員会設置 国家犯罪、人権侵害について調査、犠牲者、遺族に補償。

## アフリカの指導者たち

この3人は今すぐ覚えよう

- 1) エンクルマ（ガーナ大統領1960-66）
- 2) セクトゥーレ（ギニア大統領1961-84）
- 3) ルムンバ（コンゴ首相1960-61）

## 国際連合の対応

1963年に発展途上国の経済開発促進と南北問題の経済格差是正のために補助機関として、【18: 】を設置した。事務局はスイスのジュネーヴに設置され略称は UNCTAD（アンクタッド）。1964年に発展途上国71カ国が参加。しかし、十分な成果は出ていない。